

日本放射線腫瘍学研究機構緩和医療グループ会議議事録（案）

日時：2014年12月13日 10時-11時40分

場所：パシフィコ横浜会議センター5階 511号室

出席者（敬称略）：鹿間、野崎、内田、野村、和田、永倉、原田、荒木、斉藤、高橋、中村

① 進行中の臨床試験：JROSG 11-1（原田）

- ・12/8現在21例まで登録が進んでいる。
- ・問題点として、プロトコールではゾレドロン酸各回投与ごとに採血を行い用量を決定すると定められているが、これまで報告のあった18例中8例で何らかの逸脱がある。
- ・問題点をメモランダムとして周知し改善をはかる。

② 新規試験提案

1) 有痛性骨転移への、疼痛緩和を目的とした4-6 Gy単回での再照射に関する多施設共同前向き介入試験（斉藤）

- ・再照射では4-6 Gyでも8 Gy単回に近い有効性が得られる可能性があるとする仮説の根拠を示す必要がある。グループ内で後ろ向きに情報を集めることも考慮。
- ・有効性は疼痛緩和割合だけでなく、増悪までの期間、SREなどを含めて評価する必要がある。ランダム化比較も考慮。ただし標準治療をどう設定するかも問題。
- ・再照射の安全性に関してのDose Finding Studyとする方向性もある。

2) 神経障害性疼痛の有無が放射線治療の疼痛緩和に及ぼす影響に関する多施設共同前向き観察研究（斉藤）

- ・クリニカルクエスチョンがやや不明瞭
- ・提案された神経障害性疼痛の診断基準は多施設共同試験で実施可能か要検討。
- ・神経障害性疼痛に対する他のモダリティの治療は多岐にわたり、それらを踏まえた評価を検討する必要あり。

③ アンケート調査：出血を伴う消化管・泌尿生殖器腫瘍に対する緩和的照射に関するアンケート（鹿間 / 資料作成：小杉）

- ・54人、44施設から回答が得られた。
- ・ほとんどの放射線腫瘍医がシナリオに対し放射線治療の適応と判断した。
- ・線量分割は多岐にわたった（23ケース、20-66 Gy/5-33回）。
- ・回答を要約して回答者にフィードバックをする。
- ・試験の実現に向けてはエンドポイントを検討する必要あり。
- ・対象疾患も女性器などを含めて再検討する。